



ツキモノ
-聖夜光-

Studio ***46

目次

ツキモノ～聖夜光～

◆そして借金が遺った	3
◆プレゼントは一生分	8
◆夜の女に拾う骨なし	13
◆アイキャン・フライ	18
◆いつか鳥になる日に	23

オマケ

.....	31
◆謝辞	33

ツキモノ～聖夜光～

◆そして借金が遺った

至上最低の誕生日だった。ひと月前に養い母の郁子^{いくこ}が、癌の再発で亡くなったことも酷い。家族と絶縁していた郁子のために、十八歳目前の巴 聖^{ともえひじり}は、たった一人で四十九日の準備をしていた。そんな聖夜にその「ツキモノ」は訪れてきた。

「へえ。あんたが、トモエイクコの言ってた養女？」

初めて見る顔の、不躰な声の主。通夜と葬儀は郁子の職場の友人だけを呼べば済み、彼はその中にはいなかった。狭い1LDKの玄関で、何と合鍵で勝手に入ってきた金髪の若い男に、聖はあまりに想定外で腰を抜かしてしまった。

何しろ、このマンションに引っ越して一年、郁子と静かに暮らしてきたのに、不審な男が我が物顔で上がり込むのだ。靴箱を前に、声も出せずに座り込んでいる聖に、金髪の男はハリウッド俳優のように端整に笑った。

「オレ、『ツキモノ』の掇烙徒^{うつきらくと}。イクコの借金、あんたなら払うって話なんだけど」

「……は、い……？」

立ち上がることができないまま、どういうことですか、ときくしかない。男は何故か、淡く笑いながらしゃがむと、聖と視線を合わせて膝で頬杖をつきながら言った。

「イクコ、今度の聖夜——あんたの誕生日のために、オレの大事な人形を買ったんだ。その契約金が、六千万円」

……は？ 声を出すことすらできず、聖は固まった。

六千万。いったい何の話だろう。聖と出会ってから、郁子は聖を養子にするために風俗業をやめ、定職に就き、ここで新しい生活を一緒に始めたのだ。質素儉約の毎日だったが、聖も郁子も不満はなく、家計も互いに熟知していたはずだ。

「……そんなバカな。どれだけ凄い人形か知りませんが、郁子さんに、そんな高額商品に手を出す人形趣味はなかったはずですよ」

やっと必死に立った聖を、男も腰を上げながら上目で見ると、こんな状況で逃げ先もない聖は、持てる札を使うしかない。

「それにアナタ、何者なんですか。『ツキモノ』って、さっき言ったけど……アナタ、ま、人間じゃないですよ？」

だからこの相手に、借金などという人間の世界の法の力が使えるかは怪しい。聖には幼い頃から、普通の人と違う霊感があった。今まで何人も、人間世界に溶け込む人ならぬ者を見て来たが、目前の金髪男はその中でも飛びぬけて異端で、とても日本で真つ当な戸籍を持つ相手には見えなかった。

人間でない。聖にとっていちかばちかの反撃に、男が笑う。
「あ、良かった。それがわかるなら、話が早い」
男はくたびれたスニーカーを脱ぐと、許可もなく家に足を踏み入れた。わ！　と思わず聖は後ずさる。
次の一声で、聖は完全に男に優位に立たれることになる。
「さすが。シオンの片割れだけはある」
聖の時間が止まった。それは的確に、決定的な一言だった。

せっかく、あともう少しで、聖は成人の十八歳になれたのに。そうしたら本当に「巴聖」になれた。郁子の養子になれた。

けれどこの一年、再就職、新居への引越すと、郁子に疲労が続いた。体調不良はそのせいだと言っていたが、彼岸の頃に昔の癌の再発がわかり、一カ月もせずに逝ってしまった。

あまりに辛くて、郁子の部屋は生前そのままにしてある。聖はリビングを自分の部屋にしてもらえた。本名はまだ前のままだが、「巴聖」になる養子縁組届は書き上げてあった。実母は中学生の時に自死し、実父は聖が郁子の養子になると決めた時に、十八歳を待たないで良いと言ってくれた。ただ、未成年の養子縁組だと、独身の郁子に裁判所の許可が下りるかがわからず、許可が不要になる成人を待っていた。

強引に家に入ってきた男は、聖が入ることもできなかった郁子の部屋で、男の言葉の証拠を見せた。クローゼットには言う通り、人間の大きさの人形が入っていたのだ。その形を見て、聖の頭は真っ白になった。

それからいったい、何がどうなったのか。気が付けば聖は、狭い自分のベッドの上で、烙徒と名乗る男に組み伏せられている状態になった。

「……—」

白い天井を背に、吐息がかかるほど間近で見る烙徒の顔は、まずとにかく、外人。とりあえずそんなことを思う。

時計の針は零時。唯一の通報手段、スマホは窓際の机の上。突然やってきた不審者に、借金を盾にこうして寝転がされている。払えないなら、体を売れという契約だった気がする。

衝撃が大き過ぎて、最早状況に流されているだけの聖に、ジャケットを脱いだ烙徒が笑顔を消した。聖のシャツの襟の隙間に、細くて白い人差し指をかける。

「……ホントに、これでいいの？　あんた」

「——……は？」

もうどうにでもなれ。聖はとっくに、考えるのをやめた。郁子と出会った頃には、郁子は自宅で客を取っており、その度に聖は外泊していたのだが、その頃の郁子の仕事を嫌だと思ったことはなかった。転職は郁子自身の望みだ。

そう、他に払えるものがないなら、烙徒がいいならいい。何が何でもあの人形は、手に入れなければいけない。一人で取り残される聖に、病中の郁子が用意してくれた人形。

郁子が今まで、どれほど聖をよく見て、想ってくれていたのか、一目で全て伝わる人形だった。

まるで憐れむように、無表情に見つめる烙徒の蒼い双眸を、さすがに直視はできなかった。一つ一つ、聖のボタンを外す烙徒から目をそらしつつも、逆にきかずにはおれない。「……アナタこそ。こんな、色気のない体でいいんですか」

お世辞にも聖は、女子力があるとは言えない。むしろ黒く短い髪は、女であることを忘れるために切っていたものだ。

ぶっきらぼうでも、優しい郁子と暮らせたのは、二年弱。五歳で実父と生き別れになった聖は、養家を家出して郁子に拾われた。その後に実父と再会したのだが、どうしても共にいると緊張感が抜けず、このまま郁子と暮らしたいと願った聖を、優しい実父は許してくれた。それどころか経済援助もしてくれている。

そんな実父を、悲しませたくない思いで今日まで生きた。けれど本当は、郁子が亡くなった瞬間、聖の世界は終わった。自分が性別通りに、女であると思えないこと。普通の人には見えないものが視えること。家庭環境が複雑だったことなども含め、昔から友達を作れなかった聖には、郁子だけが心の許せる家族で、気の合う親友だったのに。

あっという間に弱ってしまった、郁子の蒼白い顔が烙徒に重なる。出会った頃には郁子は髪の色を抜いていて、烙徒の金髪と近いせいだ。

思わず、烙徒の鼠色のタンクトップを、ひしっと掴んだ。聖のシャツをはだけた烙徒の手が止まる。不思議そうな目でじっと見てくるので、もう一度きいてしまった。

「——だから。……ほんとに、おれで、いいんですか」

知らず、聖の「おれ」が出た。自身は男性だと思っているわけではないが、聖は女性的な服装が苦手で、普段の思考もおれ口調なのだ。郁子の同僚や実父には「私」で喋るようにしていたが、郁子には何も意識しないで話せた。

郁子は聖が男でも女でも、おれでも私でも気にしなかった。烙徒は先刻、質問に答えなかった。たとえ聖の色気がゼロであろうが、体が女ならいいということなのか、聖の額に軽く口付けをする行動で応えた。

そもそも烙徒は何と言って、それで聖が、六千万円を体で払うことになったか。到底その価値のない貧相な聖に、何故烙徒は愛おしそうに髪を撫でるのだろう。この数刻があまりに怒涛で、流れを思い出せない。聖の傷を開くように入った郁子の部屋で、人形を見てから烙徒と聖は何を話したのか。

人間でないことをあっさりと認めた烙徒は、人間同士なら許し難い速さで踏み込んでくる。あらわになった聖の首から肩にかけて、覆いかぶさるように冷たい舌を這わせてきた。ぎゅっ、と全身に力が入る。友達もおらず、恋や愛など無縁だった聖には、世界が終わった後でなければ、こんなに不躰な刺激は耐えられなかっただろう。

烙徒はフっ、と笑ったように、聖の鎖骨に息を落す。

「……オレには、最高のクリスマスプレゼントだけど」

「——は？」

聖の腕をそっと抱いた、烙徒の腕を焦って掴む。暗い中で少し顔を上げた烙徒は、艶っぽさと無害さ、どちらも湛えて笑っている。ますます聖にはわけがわからなくなる。

聖夜生まれだから聖。ベタな名前には色々あって、あまり思い入れがない聖なのに、烙徒の次の声に震えた。

「ずっと、会いたかった。……ひじり」

「……——！？」

顔を合わせるほどに近付いた顔。甘い声でささやかれた名は、思いがけず聖の顔をぼっと熱くする。

「その顔……反則……」

意味がわからない。そう答えかけた聖を、見事に遮った。

「だから——やらせて？」

黙ると朴訥だが、笑うと驚くほど妖艶になる烙徒。けれど蒼い目には安らぎが視える。間近になる目と目の熱に、聖は不意に、自分の心臓が動き出したのを感じた。

慣れているのだろう、と思わせる手付き。肩から腕までを撫でるように触り、足を絡めてぴたりと体を重ね合せてくる。聖に重みが乗り過ぎないように、左の手足は烙徒の体を支える。烙徒が本気であるなら、言っておかないといけない。

「——あ、あのっ……服、着てると、汚れるけど……！」

「——え？」

きょとん、と烙徒が、毒の無い声で止まってくれた。

「あの、えっと……初めて、だから……」

急にどっと恥ずかしさが来て、目を背けて言った。意図を理解したらしい烙徒が、今までで一番あくどい顔で笑った。

「……へえ？」

改めて、二人共シャワーを浴び、上着一枚で再びベッドに戻るようになった。全て脱ぐのは聖側に抵抗感があった。

自棄になったとはいえ、聖だって、誰にでもこんなことを許せるわけではない。ただただ、これは、烙徒だからで——烙徒が「シオン」を連れて来てくれたからだ。

先にシャワーを浴びた聖が、かちこちしてベッドに座っていると、ジーンズと肩にタオルの烙徒が戻ってきた。湯気と共に舞う薄い匂いに、もっと緊張する羽目になった。

「……痩せてるのに、よく鍛えてるんですね」

「——そう？ 人間のマッチョには程遠いと思うけど」

烙徒は細い。聖といい勝負だ。聖がガチガチになっているので、静かに左隣に座ると、ぼんぼん、と聖の肩を叩き——

「——っ……！」

烙徒の方を見た聖に、有無を言わずに唇を重ねてきた。逃げかけてしまったが、右の腕をそっと押えられて引けない。顔が熱くなり、いよいよか、と聖も覚悟を決めるし

かない。

キス自体は優しかった。初めてなので実際はどうなのかは知らないが、食^はまれるような一瞬と、軽く離れ、また触れられるだけの繰り返し。最初は両手でシーツを鷲掴んでいた聖も、気付けば右手を烙徒に握られていた。

「……ん……」

よくわからないが、触れ合ったそばから温かな感覚が体に広がり、力が抜ける。合わせて烙徒は侵入を始める。深さを変え体勢を変え、半時はずるずるとキスだけをしていた。

そこから先はあまり覚えていない。ただ、散々な聖夜だと、あちこち痛む体で起きた翌朝に思い知ることになる。

◆プレゼントは一生分

郁子を病院で看取る直前のこと。癌の進行や薬の影響で、最後は朦朧としていた郁子は、それでも聖に言い残した。

「ごめんね、あんたともっと、長く暮らしたかったよ……」

郁子は聖に、再発のことで、絶対に聖は自身を責めるなど言った。それが一番心配だ、と涙が頬を伝っていた。

「煙草もお酒もやめられなかったし、あんたと会う前から、通院をやめてたあたしが悪いんだ。あんたと会えて、最後に見ていてくれる家族ができて……本当に、ありがとう」

まず、聖の誕生日までは生きる。当初はそう言っていたが、ある時から急に、郁子は諦めがついたように見えた。入院を決め、仕事を辞めてしまった。思えばその辺りで郁子も烙徒に会い、「シオン」の人形を買ったのかもしれない。

郁子さん、と。自分の声で聖は目が覚めた。一人ぼっちの寝床で、思い出したように寒気が走った。二つしかボタンの留まっていないシャツで、生足で寝ていたのが当然だろう。

「うわ……これ、シーツ、総洗濯じゃん……」

まずもって自分も、体を洗わなければいけない。ときばきと寝具のシーツを外し、洗濯機の上にまとめて置いた時に、久しぶりに浴室で湯船が張られていることに気付いた。烙徒が入った後だろうか。シーツも思ったよりは、露骨な汚れが少なく、表面的な血の処理は長くかからずに済んだ。

今もいる烙徒は何やら、台所でずっと何かをしている。

「……………」

顔を合わせるのが、ひたすら恥ずかしかった。幸い台所と浴室兼洗面所は向かいで、温かな湯船にさっと逃げ込む。

自分の体も汚れており、昨夜にしっかり、何かがあったのは間違いない。案外、あっけないんだな、と、ゆったり湯につかりながら聖は思った。

「恋愛に夢はなかったから……別に、いいけど……」

行きずりの男女でも、最低食事くらいはしてから、行為に及ぶものかと思っていた。昨夜は何も食べておらず、それで良かったこととしては、烙徒に変な味は感じさせなかったと思う。それくらいだ。

「……他は、えっと、どうしたっけ？」

初めにずっと、キスだけをしていた時間は、何だか珍しく気分が良かった。体中が温

かく、抱き寄せてくれる手付きも穏やかで、ゆっくりと進む烙徒には余裕しかない。女の体が欲しいだけの、飢えた感じは全くなかった。聖だから会いにきたのだと、寝屋での戯言を本当のように感じさせてくれた。

なので、烙徒の顔を、正視できる気がしない。遊び慣れていそうな烙徒には何ともない朝だろうが、聖には人付き合いの免疫すら足りていない。どうしよう、ともだもだする内にすっかり茹でだこになり、のぼせた赤い顔で浴室を出るのを更に後悔することになる。

洗濯機がぼうぼうと回る中、風呂上りの聖がドライヤーを終えた頃合いに、烙徒が何の気負いもなくカーテンレールの向こうから声をかけてきた。

「おはよ、ご飯食べにこいよ。さすがに倒れるよ、あんた」

「——え」

昨日の烙徒は、手ぶらでやって来て何も持っていなかった。ジャケットにスマホすら見当たらないので、どうやって人間生活をしているのかと思ったくらいだ。家には買い置きは全然ないはずで、何処で朝食の材料も得たのだろう。

洗面所の向かいの、台所の引き戸を開けると、昨日と同じタンクトップにジーンズでシンクの前に立ち、烙徒が郁子のカクテルシェイカーを振っていた。冷蔵庫には確にお酒の材料くらいしかなかっただろう。

「あ、あんたはそっち」

見ると、炊飯器の保温ランプがついており、小さな机にはレトルトの味噌汁がお湯を待っている。炊飯器のふたをまず開けると、聖は赤面し直すことになった。

「——お赤飯、って」

「イクコの部屋にあったよ、それ。ひじりは放っておくと、すぐに食事を抜くから、オレがフォローしろって言った」

簡単に、白米に混ぜるだけで炊けるご飯シリーズが、そう言えばあったと聖も思い出した。郁子が入院してもちゃんと食事をするように。そう言って大量に買い込んでいた郁子。

「そんなの……はんそ、く……——」

聖の誕生日まで、生きられなかった郁子。代わりに烙徒と人形を用意し、烙徒に食べられた聖に赤飯まで用意しておくなど、郁子の明後日の方向が極まっている。まさかこんな風に、亡くなった後まで聖を愛してくれているとは。

郁子も聖とは少し違うが、人には視えない何かを視ている人だった。だから「シオン」の人形も用意できたのだろう。

「……郁子、さん……」

昨日烙徒がクローゼットから出した人形は、郁子のベッドで寝かされている。堰を切ったように、その後烙徒とどんな話をしたかも思い出し、郁子のことで頭がいっぱいになった。

唐突に涙が溢れ、崩れ落ちそうになった聖を、近くに来ていた烙徒が抱き止めた。しっ

かりとしなければいけなかった喪主の忙しさで、聖は泣くこともできなかった。

しがみついた聖に、烙徒は何も言わない。今話をすれば、きっと聖は大声で泣いてしまう。

昨夜も確か、郁子のクローゼットから人形を出した烙徒に、最初に聖は掴みかかってしまった。

——どうして、アナタが、^{しおん}志音を……！？

お姫様抱っこで人形を取り出すと、烙徒は郁子のベッドに置いた。その人形は真っ白な長い髪を生やし、聖とほぼ同じ背丈のゴシックな服の少女で……聖が十六歳の間だけ一緒にいてくれた、自称天使「シオン」と同じ顔かたちだったのだ。

十六歳の誕生日に聖は、養父と知らなかった家族とのよそよそしい生活に耐えかねて入水した。暮らしていた町の貯水池に身を投げた。その時から顕れたのがシオンだった。

誰の目にも見えないシオンは、アイドルのような可愛い服で、小さな白い羽でふわふわと漂っており、ずっと聖を見ていたと言った。聖が持つ常識や思い出も知っていて、一緒に育った家族のように話げできた。

——志音は『おれの幻覚』だって。そう言われたのに……。

聖以外に見えなかった志音を、郁子はたまに、まるで影を目で負うような時があった。そして他にも一人だけ、志音と聖の話を聴くことのできる人間がいた。けれど、他でもないその人間に言われたのだ。シオンという天使は、孤独な聖の望みで創り出された、聖のための幻であるのだと。

その時には反論できなかった。シオンが本当にいる証拠はない。けれどこうして、郁子が黙って入手した人形がシオンと同じ顔な以上、聖はもう、疑わなくていいはずだ。自身ですらも幻覚かもしれないと悩んだシオンが、少なくとも郁子や烙徒には、姿を捉えられる何かであるということ。

——それとも……これは、夢ですか。おれは、とっくに気が狂ってて、このシオンもおれの幻覚なんですか……？

もう聖には、何が正しい現実であるのか、全くわからなくなってしまった。烙徒ですらも、聖の創った幻かもしれない。

「シオン」が実際に、何者だったのかは、聖と喋っていた「志音」自身知らなかった。最初には聖の夢に現れた天使のシオンは、病院で目覚めた時には志音として横にいて、自分が誰かは知らない、でも聖のことは知ってる、と言って傍にいてくれたのだ。聖がもう二度と、冷たい水に飛び込んだりしないように。

それから郁子に出会い、養子になると決めた十七歳の誕生日に志音は消えてしまった。もう自分はいなくても大丈夫、と言って。烙徒にそれを話すと、ふーん、と息をつき、人形の頭を撫でて神妙な顔になっていった。

——幻想、っていうなら、オレ達はまさにそうだろうな。

人間ではない。何者かはわからないが、どの道社会的には認められることのない何か
が、聖の目の前にある。

——あんたはどうしたい？　イクコからのプレゼント、そう納得してシオンを受け取る
か、それともオレごと、幻だって追い払うのか。

烙徒はこの人形——シオンを欲しいなら、烙徒をセットで買え、と言った。それには月の
満ち欠けの一周期で五万円、約一カ月で十万円を請求するのが「ツキモノ」だという。
——払ってくれるなら、うちのボスがオレっていう幻を維持する。払えないなら、あん
たにオレを維持してもらわなきゃいけない。イクコはそれ、五十年分を買う、って言っ
たんだ。これから一生、オレはあんたを支えるように、って。

ひと月十万。それで五十年で六千万円らしい。更に言えば五十年契約にするのなら、も
う看取りまでサービスで込み、ということらしい。五十年で払い止めというわけだ。

シオンが欲しいのに、何故烙徒がセットでついてくるかはさっぱりわからなかった。
オレがいないとシオンは危ない、と言っていた気がする。聖としてはシオンの姿の人形
があるだけで充分で、それだけ大切な相手だった。そもそも烙徒も人形も、ついに気が
ふれた自分の幻覚である説が濃厚だ。

何しろたとえ、郁子が聖の視ていた志音を辛うじて知っていたとしても、まずどうやっ
て烙徒を探し、シオンと関係のある何がしかだとわかるのだろう。郁子はどう考えても
普通の人間だった。これはやはり、聖が郁子の死まで巻き込んだ、独り芝居の幻覚物語
である可能性が高い。

郁子からの、一生分のプレゼント。そういうことにして、幻覚達を受け入れることに、
何か問題はあるだろうか。もう聖の世界は終わったのだから、ただ消化試合の人生を生
きていくなら、幻の慰めの中において何が悪いのだろうか。もしも問題があるとすれば、そ
れは、烙徒が幻ではなかった時だ。

——払えなければ、おれがアナタを維持する、って何ですか？

仕送りはある。更には郁子が、癌になった当時の保険金を遺してくれた。けれど月十
万を幻に払うのは一回でも問題だ。

聖の乏しい想像力の産物とは思えないほど、幻覚にしては容姿の整う烙徒が、そこで
言い出した事が昨夜の件となった。

——あんたの生命エネルギーを分けてもらおう、っていうか。早い話、やらせてくれる？

それはそれは。ド直球に言った烙徒に、まるで漫画のような展開と聖は思った。悪い
夢ならまだわかるが、現実で見る幻なら妙に生々しい。そんな幻覚設定を創ってしまう
ほど、自分は欲求不満だったのだろうか。いっそ笑えてくる。

そうしてその後、容赦なく烙徒に食べられたのだ。記憶が胡乱とはいえ、痛かったし、

シャツもシーツも汚れているし、聖が自分で赤飯など炊いた覚えもとんとない。今この台所で、確かに掴む烙徒の服も幻なのだろうか。流れを思い出すほど聖の混乱は深まっ
ていく。

「とりあえず、まず、メシ。あんたは食べなきゃ駄目だよ？」

やっぱり、これは夢だ、と聖は思う。こんな女子力ゼロの聖に優しい声をかけて、睦み合った後に朝食を用意し、頭をぼんぼん撫でてくれる男性など、あまりに都合が良すぎる。

——ありえない……。

しかも、烙徒が好きだ。と、ちよろくも思ってしまった。自分でも驚くのだが、烙徒の腕が心地よくて胸から顔が熱い。己を女性と思えず、恋もしたことのない聖が異性愛者というのも想定外の話で、その時点で全てが幻想だろうとわかった。

それから聖の、幻覚というには不埒に過ぎる日々が始まることは、このクリスマスの朝には思うべくもなく。

◆夜の女に拾う骨なし

賃貸とはいえ自分の家なのに、すっかり、聖の居場所は、温かなお湯を張った浴槽であることが増えてしまった。

「ありえない……こんなの……こんな幻……」

聖が外出する気力がないのをいいことに。烙徒はこの三日、毎日朝晩、聖を長いことベッドに引きずり込むのだった。

「これが幻なら、私……ヘンタイだ、こんな生活……」

郁子の部屋は手つかずにしておきたく、烙徒は聖の部屋に始終居座っている。だから少しでも隙を見せると、昼間でも手を出してくる。通信制高校生の聖は基本引きこもりであり、バイトはしていたが、郁子の再発を知った時にそれもやめた。

赤々とほてる顔を、湯冷めするまでふやかす毎日になった。同じ部屋でぐったりしていたら、また襲われかねないために浴室に逃げ込む。烙徒は暑いのが苦手らしく追ってこない。

「だめだ……バイト探そう。こんなじゃダメになる、おれ」

正式な養子になれなかったので、郁子の遺産を手にするると贈与税がかかってしまう。相続の申告が必要な額ではないが、贈与にしないと相続権は郁子の両親にあるので、生前贈与や葬儀費用で総計はいくらか目減りしていた。それでも実父の仕送りがあれば、FIREも目指せるかもしれない、とつい考えていた。実父は大恋愛で番った母に離婚され、聖を長年引き離されたショックで、聖に非常に甘くしてくれるのだ。

洗面所で髪を乾かしていると。鏡の中には無愛想で可愛げのない、短い黒髪でパジャマな聖が映っている。

「もうとっくに、手遅れかもしれないけど……でも……」

果たしてこんな、毎日がいかがわしい隠居生活は、本当に聖の願望による幻覚なのだろうか。そのこたえを確かめたいなら簡単だ。烙徒と一緒に、外に出てみればいいのだ。「烙徒さんが他の人にも見えて、喋れる生き物だったら……あれ、それは、それで……」

幻覚であるなら、話は終わりだ。重症だと入院させられることのないよう、本当に引きこもり生活に入ってしまう。しかしもしも、烙徒が普通に人間世界に溶け込んでしまえる生き物だったら。「烙徒が見える他人」まで、聖が幻覚で創る可能性もゼロではないが、本当の本当に「人間でない何かの生き物」の場合、差し迫った危機が一つ浮かぶ。

「……子供は、多分できないって、言ってたけど」

捨て鉢だった聖は、最初から今まで全く避妊をしていない。せっかく落ち着かせた顔がまた激しく赤くなった。人間の聖と人間でない烙徒は、烙徒が幻覚でも生き物でも、妊娠する可能性は確かに少なさそう。むしろ妊娠の兆候なんて出た場合には、それこそ想像妊娠を疑う事態だ。それなのに、

「……………できたら……ほしい」

きっとそれは、幸せなこと。呑気にそう思ってしまった。鏡では耳の端まで赤くなった聖が黒い目を潤ませていた。

今時、食糧は、ネットスーパーで頼めば買い物も出なくていい。烙徒は重い宅配物を、快く受け取りにしてくれる。それも幻覚で、本当は聖が自分で受け取っているのだろうか。宅配業者を呼び止めてきくわけにもいかず、現実と幻の境について、聖は机でうんうんと頭をうならせてしまう。

「ひじり。こっちのお酒は、オレが飲んでいいやつ？」

「……うん。全部、アナタ用だし」

振り返りつつ不機嫌に言っても、烙徒は穏やかにニコニコしている。人間でない烙徒は食事がいらなげいと言ひ、力の源はお酒らしい。聖はお酒に弱いため、空き瓶が積み上がれば烙徒の消費だと確信できそうではあるが、それも病んだ聖がアルコール依存症になった可能性も否定はできない。

真面目に勉強していると、烙徒も空気を読んで手を出してこない。代わりに、聖の集中が切れる度に、ちょうど上手く口を挟んでくる。

「あんたさあ。この先、シオンが動けば、嬉しい？」

「……何度も言ったじゃないですか。烙徒さんの負担になるなら、おれは別に、志音が郁子さんと一緒にいてくれるだけでいいです」

このままあの部屋を、郁子と人形のものにしてしまうのは、かなりの不経済ではある。郁子は荷物が少ない人だったので、仏壇を置いてもかなりスペースが余る。

「それより、そろそろ聴いてもいいですか、これ」

「？」

「烙徒さんと志音はどういう関係ですか。というか、シオンは何なんですか？ それは教えてくれませんでしたよね」

幻覚であっても、設定を詳しく知っておくのは悪くない。志音がいた頃はあまりに自然に、人外生物を信じてしまっていた。明らかに気配の違う生き物とは幼少からよく出会ったのだが、その気配自体が長年の幻覚だったのかもしれない。

クリスマスの朝、聖がもそもそと赤飯を食べている間に、烙徒は一応素性を教えてくれたのだ。けれどシオンの人形については、「オレの助手」としか言わなかった。

「郁子さんが烙徒さんを見つけたんじゃないって、烙徒さんがそもそも郁子さんに近付いた。郁子さんがもうすぐ死ぬって、シオンから連絡が入ったから、って」

振り返ると、聖のベッドをソファ代わりに、壁にもたれて烙徒はくつろいでいる。もうこの数日はおなじみの光景だ。何やら烙徒は、「己の属性から外れた生き物専用の死神」だと言い、郁子は聖に隠れてシオンと付き合いを深めていたため、人間外の存在に見なされて烙徒が迎えに来たというのだ。

「だから、オレはついでに……必ずシオンの近くに生まれるはずの、ひじりも探しに、この世界に来ただけ？」

烙徒は初めての夜に、「会いたかった」と言った。それから溺愛と言って差し支えない熱で、聖を抱き潰す毎日。それは烙徒が故郷の世界で、愛した人の転生者が聖だからだと言う。

本当かどうかは測る術がない。なのでその話は保留にしておいた。あくまで仮定として、聖は話を進めることにする。

「はやりの異世界転生物なのはわかりました。でもそれは、聖のことは説明しても、シオンの説明にはなってないです」

「え？ シオンがこっちに生まれたら、あんたの言う志音になってたはずなんだけど」

「だから、烙徒さんの世界では、シオンは何者なんですか。志音は生まれなかったし、おれの幻覚扱いですし……志音も自分が何なのか、全然知らなかったんです」

なるほど、と。聖がこの話に拘る理由が伝わってくれた。

「それなら、あんたとシオンの関係の方が、大事な話の気がするけど？」

「……——」

言葉に詰まった。聖の方を見て壁から背を起こした烙徒は、聖を見透かすような静かな蒼の目を向ける。

「あんたは自分が誰かを知らない。だからシオンが何者かもわからない。でもそれは絶対に、知らないといけないこと？」

ここまで言われると、聖も意図はわかる。烙徒は初めから、聖のことも志音のことも、何者であるかを隠したいのだ。

「ここでのあんたは、ちょっと靈感があるだけの人間。志音はそんなあんたの^{つきもの}守護者。それで何で、いけなかったんだ？」

烙徒は何故、話したくないのだろう。そちらが気になってきた。所詮聖の幻覚であるなら、そんなに細かい設定はない、ということなのかもしれない。

烙徒に何も答えられなかった。問い詰めてもこれ以上、聖と志音の設定を教えてくれそうにない。

郁子が亡くなってから、腑抜けてしまった聖のため日中の烙徒は家事を手伝ってくれ、暇な時間はバイト雑誌を読んでいる。共同生活相手としては、なかなか好漢に思える。朝晩も下手をすると、異様な床上手かもしれない。恥ずかしくてもうダメ、と何度も聖は思うのに、気が付けば愛しい気持ちで優しい腕の中で眠っている。

——ちょろ過ぎる……烙徒もそう思ってたら、やだな……。

単純な話だった。聖は体にせよ心にせよ、こうも他人から求められたことがない。その熱が甘い。体を捧げるだけではなく、聖に「好き」が湧き上がると明らかに烙徒は嬉

しそうにする。どうしてわかるのだろうか、と更に恥ずかしくなる。

烙徒はあくまで聖のペースで触れてくる。恥ずかしがっているとぐずぐずと時間が過ぎてしまう。こんな面倒な相手に毎日構うことはないのに、烙徒が幸せそうにするから、結局聖も朝晩共に応えたくなる。

だから多分、異世界で烙徒が愛した人、という設定は上々なのだろう。そして無理に、烙徒が幻覚であるかどうかを、聖は暴きたくない。できればしばらく、決して外に出ずに、この幻の甘い夢にこもっていたい。それでもし、取り返しがつかない自分になれば、闇に消えてしまいたかった。

明日から年末の大掃除をする、と言うと、烙徒はOKだと笑い、今夜はボスに報告に行く、と言って家を出ていった。

「あんたとの契約、ひとまず正式に始めるって言うてくるよ」

烙徒なりにこの数日、聖と上手くやっっていけるかを測っていたようで、幻覚だとしても設定は一貫させるらしい。聖は見送るしかなく、このまま、烙徒は帰ってこないのでは、と心細くなってしまった。

「ダメだ……すでに思い切り重いし、おれ……」

烙徒がいなくても、シオンの人形は郁子の部屋にちゃんと寝ていた。見た目は完全に人間なのだが、触ると冷たく肌も人間ほどは柔らかくなく、人形であるのだとわかる。

烙徒のいない寝床が淋しくて、何となく人形の横に座って見つめていた。電気を消した郁子の部屋に、郁子もいつか、現れないかと聖は思う。でなければ何のための靈感だろう。

「母さんや志音は、何度も夢に出たけど……」

夢を見ている時に、これは夢だ、と大体聖にはわかった。けれど今、数日以上続く甘い夢が、幻か現実か断言できない。一人で眠れば次に目が覚めた時、烙徒も人形も消えていたらどうしよう。それなら夜通し、シオンを見ていたかった。

夜が深まる。空気がひやりとしてきたので、シオンの手を握る。窓の外を通る車の、ライトが時々微かに差し込む。

一瞬、うとうととしてしまった。強い寒気に襲われ、目を開けると叫びそうになった。人形が忽然と消えていたのだ。

「え——シオン……！？」

冷たい風でカーテンが躍ったので、窓が開けられているとすぐにわかった。慌てて窓際にいくと、バルコニーから夜の空に向かい、柵を蹴った残像が見えた。

「まさか……上へ——！？」

これは幻が、終わったのではない。人形は自ら動き出して、何かしようとしているのだと聖の靈感が訴える。

止めなければ、と咄嗟に思った。ジャージのような部屋着のままだが、温かなフードパーカーだけ羽織って外に出た。

人形の行き先はおそらく屋上。外階段を駆け上って、鍵のかかった仕切りを登って超えた。その先で待っていたのは、暗い町を背に、真っ白な髪をたなびかせるシオンで――

「志音……じゃ……ない、よね……？」

「……………」

人形は、会ったことのない人のようにふんわり笑っている。それもそのはず、今やうっすらと、黒い翼を背に立っている。白い羽の志音とは違い、金に光る目も瞼に映る映像のようで。

初めまして、と。半開きの口から出た声で、人形が笑った。

「わたしは、^{めいや}冥夜。あなた――聖夜になる前の、わたし」

「……え？」

唇は動かず、悪意の宿った声。聖の全身に悪寒が走った。この耐え難い吐き気を含めて自分の幻覚だと言うのだろうか。

幻想の答え合わせが始まる。やっと満ちつつある夜の中で。

◆アイキャン・フライ

夜風が吹き付ける屋上の、コンクリートの絶えない寒気。それは年の暮れという、季節だけのせいではなかった。

「あなた、可哀相。彼に騙されてるのに、気付いていない」

「……え？」

彼というのは、烙徒で間違いないだろう。人形の体で喋る誰かは、烙徒のいない夜を待って動き出したのだから。

烙徒が聖や志音について、何かを隠しているのは確かだ。その設定を教えてくれるなら、と話を聴くことにする。

人形はシオンの顔であるのに、似ても似つかない妖しげな微笑みを浮かべる。

「彼が探してるのは、シオン。あなたに構うのも、そうしてシオンを目覚めさせたいから。だって、彼の愛する人が転生するのは、これから生まれるシオンだもの」

「……シオンが、愛する、人？」

「彼の世界では、彼女はまだ生きてる。でも彼女には永遠に触れられないから。わたしを散々、彼女の代わりにした後に、今度はこの世界でのわたし——あなたを弄びたいだけなの」

……何だ、と。人形が何を考えているかはわからないが、烙徒の隠し事については、その程度か。と思うだけだった。

「えっと。おれはあなた、という認識でいいんですか、それ」

全てが人形の言葉通りとは思えない。人より相手の本質に触れる靈感を持つ聖は、悪意を持つ相手の嘘はわかる。

たとえ人形の言葉が本当でも、烙徒に愛まで望むのは酷だ。

「烙徒さんが幻覚——おれに都合良いだけの存在じゃない。そう言ってるって、おれは受け取っちゃいますけど」

元より幻覚を疑う相手に、真の愛など期待すべくもない。たとえ幻覚でなくても、同居する家族にも遠巻きに接されてきた聖が、突然郁子以上の愛を手に入れられるなど、信じているわけがない。やっぱり、と思うくらいのことだ。

「おれにそんなことを言って、あなたの目的は何なんですか。あまりシオンの人形で、悪趣味なことは控えてもらえますか」

全てが嘘というわけではない。けれど今、人形から絶え間なく届くのは悪意だ。

烙徒には変わらず感謝できる。多少の落胆はあるが、一人ぼっちの聖に声をかけてくれた、それで充分だった。だから人形が言い出したことに、聖は顔かざるを得なくなる。

「……あなたも、彼も。シオンにもう一度、会いたいでしょ？」

「……？」

シオンの顔をしてはいるが、中身は全く違う悪意。それがこの夜に顕れたのは、ひとえにそのためだと言った。

「あなたとシオンは、必ず共にある闇と光。聖なる夜が宿す星の瞬き。ただ少し、あなたは早く生まれ過ぎたの」

だから一度、リセットしましょう？ 屋上の端で、本当に人形が発しているのかわからない声が、とても遠く聴こえた。

シオンの人形を、動かしたいか。烙徒が少なくとも二度はきいた言葉は、烙徒自身の望みを映していたのだろうか。

「……リセット、って。死ね、ってことですか、それ」

「——いいえ？ でも、あなたには同じことかもしれない。あなたがシオンになればいいの——予定より早く、シオンを人間にすればいいだけ」

なるほど、そういうこととは。悔しいな、そう思わざるを得ない。聖が納得する発想を、悪意の人形は見透かしている。

シオンに会いたい。会いたいに決まっている。烙徒よりずっと優先度が高い。誰かも知らない志音と一緒に居られた十六歳の日々は、郁子に出会えたこともあり、聖の人生で一番幸せな時間だったと断言できる。

郁子も志音も、当たり前のように同じ空間にいてくれた。もうどちらもない。聖自身との関わりを、望んでくれる人はいない。実父や烙徒には、血縁や契約で保護されただけ。「娘」や「愛する人の転生者」なのが重要で、今ここにいる聖が、好ましい人間かは関係がない。だから実父は無理には同居を望まなかった。聖の正体の話も烙徒には必要なかった。

「そんなの……シオンになれる、わけなんて……」

それができたらとっくにやっていた。いつも聖を朗らかに見守ってくれて、聖の幸せを願い続けてくれた優しい志音。あんなに可愛い女の子に聖はなれない。くるくる機嫌や表情が変わっても、人を傷付ける悪意のない本当の天使には。

どっと溢れて来た涙が、声にも滲んだ聖を人形は憐れむ。

「可哀相。あなたがシオンだった時間はちゃんとあるのに、気付いていないのね」

「……え？」

「溜め池に飛び込んだあなたを、あなたに代わって助けたのはシオン。本当はあなたの体を使えるのよ。でもあなたに、この人生を生きてほしいから、シオンは遠慮しているだけ」

「——」

腑に落ちる。というのは、こういうことを言うのだろうか。それともまさに、それこそ聖の欲しかった、聖に都合の良い言葉だからだろう。それなら聖は、後をシオンに任

せられたら、遠慮なく退場することができる。妻子に自殺された、と実父の顔に泥を塗るのは悪い。そう考えることはなくなる。

人形の言う通り、聖が貯水池に身を投げた時からシオンは顕れてきた。それならもう一度、似た状況を作ればいい。

「シオンは飛べるよね。逆に言えば、シオンが飛ばないと、あなたの体が死ぬ。そんな状況にすれば、簡単でしょ？」

奇しくもここは、誘い出されたマンションの屋上。かなり下から、人形は黒い翼で飛び上がってきたこと、志音は実際ふわふわ浮いていたことが、聖の澱む確信を深める。

「おれは……志音に、なれる……？」

そうすればもう一度会える。長い切望だけが聖を満たす。

その後はもう、何も聴こえなかった。ふらふら屋上の柵を登り始めた。貯水池に飛び込んだ時にも鉄柵を登ったように。

明かりも減った真っ暗な夜景に、ふと思った。もしもこれで聖が死ぬ場合、人形は何が目的だったのだろう。邪魔者を排除し、烙徒を独占することだろうか。

「というか……みんな、飛んじゃっていい理由を作るための、おれの幻覚……？」

そうでないと、辻褄が合わない。聖がただ、死にたがっていただけならわかる。甘い夢が終わる時は、闇に消えたいとつい今日に思ったばかりだ。

「でももし……幻覚じゃ、なかったら……」

この数日が幻覚なら、聖はどれだけ淫欲の主なのだろう。烙徒についても淫夢を疑うところだ。けれどももしも、烙徒が本当に「人間でない死神」だとしたら。聖を言葉通り探しに来てくれて、出会えた嬉しさに襲い倒して、明日から一緒に大掃除をしてくれる気だったら。

でも幻覚の設定通りであるなら、ここから飛べば烙徒の元にいけるのではないか。死神なら聖を連れて行ってほしい。烙徒が幻覚ではないなら、志音も幻覚じゃない。聖の代わりにこの体を使い、烙徒と二人で生きてくれたらいい。

残念ながら、幻覚であってもなくても、飛べばいい結論になってしまった。どうせここまで幻覚が酷ければ、遠くない日に病院行きで実父に迷惑をかける。

吹っ切れてしまえば早かった。運動神経が良い方の聖は、ためらいもなく夜に向かい、高い柵を乗り越えていった。

意識はすぐ失った。これだけ高ければそのはずだろうに、周囲が暗くなった聖の周りに、見事な走馬灯が現れてきた。

「あれ……志音……と、郁子、さん……？」

自分の体も見えない聖の前に、再生されたおかしな光景。

聖以外には見えず、誰とも関わらなかつた志音が、郁子に歌を^{うた}唱っている。郁子は煙草をくわえて座りながら、優しい顔で志音の歌を聴き続けている。

「……待って……私、も……——」

二人の横に聖も現れていた。志音がいた頃の、少年のような服で駆けよる。そんな状況、有り得なかつたことであるのに。しかも聖はここにいる。ぴくりとも動くことがで

きずに。

少年の聖が志音を引っ張り、郁子の前からこちらに連れてこようとしている。

「……やだ……私も、そっちに、いきたい……」

しばらく、少年の聖と、志音が追いかっこをしていた。やがて郁子がおもむろに立ち上がった。志音は郁子の後ろに隠れ、郁子はぼんぼん、と少年の聖の頭を撫で叩く。

いやだ、と。少年の聖も、帰りたくない、と、ベソをかき始めてしまった。志音は辛そうに陰から見つめ続けている。

「……………」

そうなることは、わかっていた。郁子はまだ、聖を迎えに来てくれない。だから聖は、ここから動くことができない。

安らかな二人を邪魔したくない。これ以上心配をかけてはいけない。指を立てる胸の奥に、切り裂かれる痛みが走った。

烙徒、助けて。志音が最後に、そう唱ったような気がした。

「ひじり……！！」

かなり無理のある体勢で、外階段から身を乗り出した烙徒が、落下しかけた聖の腕を掴んだ。体重が全て腕にかかり、胸の奥まで引きずり出されるような痛みが襲う。

「——！」

けれど痛みは一瞬で済んだ。烙徒にも同等の重さを課したはずの体は、確かな烙徒の手の熱を受けた瞬間、まるで天地が逆転したように、ぐるりと大きな弧を描いて外階段に引き戻されることになった。

「……って、えっ……！？」

いくらなんでも軽々過ぎる。たとえ烙徒が外見に合わない怪力持ちでも、この回転の力で腕や肩まで痛みがないわけがない。それなのに下から風で吹き上げられたかのように、聖はふわり、と烙徒に抱きかかえられていた。

死にそんな顔付きで聖を何とか確保した烙徒は、そのままべたり、と階段に崩れ込んでしまう。

「ああ、もう……死ぬかと思った……」

何の痛みも感じることなく、ふわふわとする聖の全身とは裏腹に、烙徒の体は外からわかるほど心臓が爆走している。聖が声をかける間もなく、ぎゅうう、と強く抱き締めてきて、ごめん、とひたすら繰り返していた。

「やっぱり冥夜の奴、置いてくるべきだった……。シオンがいれば早いなんて、考えるんじゃなかった……」

「……え……？」

そしてふと、聖は気が付く。何やら烙徒の、抱き締める手がずっと聖の背と宙を行き来している。まるでその背に羽があって、それを撫でているような手つきで。

「そりゃ、こうすればシオンが生えるって、オレもわかってたけど……こんなちっこい羽で浮いたところで、絶対怪我はするのにあいつ」

え、え、と戸惑う聖だったが、背中には確かに、何か妙に熱いものがあり、体が軽過ぎる違和感が続く。そのために、大回転は痛くも何ともなかったが、烙徒の言が本当であれば、落ちた時に無傷というわけにはいかなさそうだった。

そして烙徒は、やっと少し聖を体から離すと、まっすぐに辛そうな顔を浮かべて言うのだった。

「ごめん、もっとちゃんと言っておけば良かった。あいつは冬花紫音^{とうかしオン}——になる前の、冥夜っていう悪い奴で。あいつが紫音になるためには、あんたの羽がいるから黙ってたんだ」

「……？」

聖は正直、気絶から醒めたような状態のため、頭がぼーっとしてよくわからない。ただ、烙徒が謝るのは変で、むしろ自分が謝らなければとハッとしていた。というのも、「ほんとにごめん……だから……死なないで、ひじり……」

烙徒が泣いている。人形が聖を狙うのはわかってたのに、と心底後悔している。聖が何か言う前に再び抱き締めてきて、しばらく二人で、寒い階段で強く抱き合っていたのだった。

◆いつか鳥になる日に

屋上で動かぬ人形に戻ったものを、仕切りを越えて部屋に戻すのは大変だった。聖も烙徒も体が冷え切り、一緒に寝ると聖が風邪をひく、と言って烙徒が床に寝転んでしまった。

「オレ、そんなに簡単に体温上がらないから」

確かにいつも、行為中に温かくなるのは聖の体ばかりで、烙徒が普段以上に冷たければ付近一帯を冷やしそうだ。

けれど納得いかなかった。丁度いいのでホットカーペットの電源をつけ、枕と布団を床に下ろして二人でくるまった。

「……ちゃんと色々、教えてから寝て」

「……」

烙徒が笑う。これ、温かいな、と嬉しそうにするが、暑いのは苦手と言っていたので温度は気を付けなければいけない。

「ひじりがききたいのは、何？」

「……トウカシオン、とか。メイヤって、誰？」

あれから烙徒は、聖に生えた見えない羽をしまわせつつ、「シオンが実際、何なのかは、オレにもわからないから説明できない」と言っていた。烙徒が聖の背中に手を当て、押し込むようにすると、一応羽は体に戻ったらしい。

「シオン自体は、『天気雨』とか、『聖と魔』とか、矛盾する属性を持つ奴に好んで憑く羽なんだ。でも同じような矛盾を持ってても憑かない相手もいるし、どういう羽なのか、憑く基準は何なのか、冥夜も断言できないって言った」

それらの話の続きをする布団の中で。烙徒の愛する人が、まだ故郷で生きているのは本当のこと、とあっさり認めた。

「あっちにはオレの居場所がないんだ。こっちでは『ラクト』の枠だけ残ってて、オレはそれが使えて、人真似ができる。ひじりは要するに、オレの好きな奴の枠に、こっちではまる人間、って思ってくれればいいよ」

その彼女にも靈感があり、シオンが憑ける人間だという。枠が同じなら性質は基本同じで、転生者というのは多くの場合、同じ枠を使える鏡写しの稀な存在に過ぎないのだと。「『本来のラクト』はオレの親戚で、冥夜が愛した死人。冥夜はオレをラクトにしたいし、自分はシオンになりたいんだ」

「……？」

「冥夜はひじりにも、シオンにもなれる、悪い……女神かな。何もしなければ一番近い『聖夜』枠に納められてしまうから、自分を引き寄せるひじりが邪魔だったんだろ」

シオンになりたい。烙徒に愛されたい。それは聖と同じ心だろう、とよくわかった。だからあれだけ聖も見透かされた。けれど、と烙徒は、横向きに見つめ合いながら苦笑う。

「確かにオレが探したのは『聖夜』だけど。オレが会いたいのはひじりだって、あいつも知ってるはずなのにな」

この口ぶりだと、聖夜イコールひじりではないのだろうか。不可解げに見つめると、またよくわからないことだけ言った。

「聖夜は少し、バグっててさ。自分を『セイ』だと思ってる。オレはどっちも好きだし、両方欲しいだけなんだけど」

どういふことか、と尋ねる前に、聖の髪にしきりにキスを始めてしまった。烙徒も聖もキスが好きであるようで、ついぼやっとしてしまう。なので後は、夢現になりながらきいた。

「じゃあ……トウカシオン、っていうのは……？」

「冥夜がシオンになった場合。さっきみたいに、悪いことをしようとする。でもひじりにシオンの羽が生えたから、もう大丈夫だと思うよ」

それなら——と、聖は思う。確かに悪意の人形ではあったが、「聖をシオンにする」が本当の目的だったのではないか。それで「冥夜」が、「シオン」になれなくなったとしても。

人形は再び、郁子のベッドで眠っている。烙徒も疲れたのか、今日は柔らかなキスだけで襲ってくる気配はない。

カーペットだけの床は固いが、体はすっかり温かくなった。眠りに落ちる瞬間、烙徒が悲しげに笑った気がした。

「ちょっと、惜しいけど……」

お休み、メイヤ、と。最後の声はもう聴こえなかった。

朝になると、すっかり暑くて目が覚めた状態だった。床で眠ったのは初めてではないが、烙徒が温度設定を上げて先に布団を出て行ったのだ。

「……あれ……」

朝はまた、起きてすぐに、いかがわしいことが始まるかと思っていた。決して期待してたわけじゃ、と己に言い聞かせながら、朝ご飯を用意してくれている台所に向かう。

「あ、おはよ。ご飯、食べるよ？」

烙徒は正直、料理は全然できない。お金と家電の使い方や簡単な家事だけ、この世界で真面目に学んだ死神だという。聖がぼけっと、ありがたく冷凍のピザを頂き始めると、少し神妙な顔付きで大事な話を始めていた。

「昨日、ボスに、連絡用のスマホを持ってって怒られたんだ。言う通り、一人にしたあんたを危ない目に合わせたしさ」

「……はい？」

「オレもこれから、バイトしなきゃだし。戸籍は借り物のがあって、今十八歳になってるから、これから色々いるってさ」

要するに、「ツキモノ」のひと月十万というのは、烙徒の場合単純に生活費らしい。家

賃や各種税金や年金、生きてるだけで今後最低月十万はいる、と教えられたというのだ。

「それなら一応……おれのスマホで、まず慣れてもらえば」

そんな具体的な話になると、聖も呆気にとられながら頭を働かせる。もしも本気で、新しい生活が始まるのなら、烙徒は幻覚ではない。それなら共同生活相手として、連絡手段を持ってもらうのは当然だろう。郁子も聖を拾ってすぐさま、スマホを持たせてくれた優しい思い出がある。

「でも、烙徒さん……本気で五十年、おれという気です？」

「五十年。っていうか、あんたが死ぬまで？」

あんたが嫌でない限り、と穏やかに言う。こんなに優しい美形を相手に、誰がNOを言うだろうか。やはりあまりに、都合が良すぎる話で、聖は警戒モードに入ってしまう。

「そんなことして、烙徒さんに何の得があるんですか？」

「え？ 得しかないけど？」

即答されたので、はい？ と顔を歪めると、机の向かいで烙徒が頬杖をつきながら微笑む。

「ひじり、可愛いし、優しいし温かいし。一人暮らしできるくらい何でもできるのに、自信がないところも恥ずかしがりなところも、全部可愛い、オレの小鳥」

「——って……！」

それはあまりに褒め過ぎだろう。また幻覚の確信を上塗りされるようなものだが、烙徒はお構いなく続けた。

「人間の一生なんて、オレ達には一瞬だよ。あんたは自分が傷付くとわかってて、シオンもそうだし、オレのことだって受け入れてくれた。この件で、一番損する奴がいるとすれば、あんただとオレは思うんだけど？」

烙徒の言うことは、優しい嘘だ。人間として生き続けるのに執着のなかった聖は、烙徒や志音が人間でなくても、何の不具合もない。烙徒に偽りでも戸籍があるなら尚更だろう。

「でも、烙徒さん……故郷の彼女さんは、今でも烙徒さんを待ってるんじゃないんですか……？」

それだけはどうしても、拭えない思いだった。本当に聖と同じ心の持ち主なら、烙徒を待つだろう。聖ならそうする。

烙徒もその話は弱点であるようで、たはは、と首を傾げた。

「でも、あっちは後、五年くらいで死ぬよ。それにひじりは独り暮らしだけど、あっちは沢山、イイ奴に囲まれてるし」

烙徒の声に、必死に隠した悲哀が混じった。居場所がないと言っていたが、絶対に会えないわけではないのだ。

「……それなら、尚更です。後五年しかないなら、ちゃんとそばにいてあげてください。おれはその間に、烙徒さんがいつ戻ってもいいように、きちんと社会人になっておきます」

ぼかん。とした顔で、烙徒が黙って聖を見つめた。

聖は続ける。たとえ烙徒が幻覚でも現実でも、その設定に悔いがなく過ごせる未来のために。

「心配なら、シオンの人形を置いて行って下さい。あれさえあればおれは大丈夫です。た

とえ、烙徒さんが何かで帰ってこれなくなっても」

どうしてこうも、強い想いで言えているのかはわからない。けれど、そうしなければいけない、と思った。聖にシオンの羽が共にあるなら、きっと一人で頑張っていける。烙徒には幸せであってほしい、と心から願うことができた。

おそらく烙徒は、郁子が亡くなり、自暴自棄になった聖を心配して来た。今ではそれがよくわかった。それは予定より少し早かったのだ。安堵を隠せない烙徒に嘘は感じられない。

「……本当に、やっぱり、ひじりは温かいな」

聖だって、故郷の人を想われながら一緒にいられるより、烙徒がフリーになって帰るまで準備をする方がいい。烙徒が聖を「可愛い小鳥」と言うなら、自分で許せる範囲の可愛い人になる道を、これから模索してみたかった。

大掃除を手伝う約束があったので、年明けに故郷に帰る、と烙徒は言った。愛する人に直接会うのは難しいが、陰から守りたい想いは持ち続けているのだという。

「烙徒さん、凄く軽そうなのに、案外一途なんですね」

聖への触れ方をみると、女慣れしているのは間違いがない。けれど本命に手を出したことはなく、それで「同じ粋」の聖にはかなり嵌ってしまったらしい。烙徒を見送る参道のそばで、除夜の鐘を聞きながら、最後にのんびり話げできた。

「ごめんな。あんたがあんまり、死にそうな顔してるから、つつい沢山襲っちゃった」

参拝者のいる通りは避けているので、烙徒が周りで見えているかは結局わからなかった。ここは聖が、郁子と出会った神社でもあった。

この後聖が独りで帰った時、シオンの人形が消えていたら、烙徒は幻覚だろう。それでも良い、と思った。郁子を失った辛さから立ち上がるため、今日までの甘い夢があったのなら、こうして外に出られた自分は合格点だろう。

「……死にそんな人間を襲うんですか、烙徒さんは」

「ううん、ひじりだけだよ？ 何回触っても初々しいから、可愛過ぎて我慢できなかった、ごめん」

「……きいたおれがバカでした。やめましょう、この話」

あーあ、と烙徒が残念そうに笑う。真っ赤にならないよう何とか自分を保つ聖に、愛おしそうに頭を撫で叩いていた。

いかにも妖しげな林に向かって、聖に別れを告げる前に。烙徒はポケットから名刺を一枚取り出し、手渡してきた。

「何かあって、オレがいきりそうだったら、ここに連絡して。あと、シオンが動いた時は注意。ひじりの命を使ってるから」

人形が今後も郁子の部屋にいて、時々動いたり、話したりしたら。やっぱり幻覚も注

意だなあ、と聖も受け取る。何の気なく、渡された名刺を見て、心底驚くことになった。

「って——アナタの言ってた『ボス』って、玖堂、咲姫！？」

「うん、オレの伯母さんと『ツキモノ』を共同経営してる。オレがラクトの枠でここにいるのも、一応はボスのおかげ」

玖堂咲姫。それは聖にとって、一言で語れる相手ではない。

「ありえない！ 伝説と消えた幻の動画アイドル、玖堂咲姫にゃんが上司！ 凄くあやしい人材派遣会社の経営！？」

聖が唯一、この世で嵌った存在。咲姫ちゃんベルトもあるし！ と叫ぶと、それ、ガチだな、と烙徒が大笑いしていた。

大好きだったアイドルの介在。都合の良過ぎる美形死神。

やっぱりこの一連、おれの幻覚っぽい。がっくりしつつ、林道に消えゆく烙徒を見送る胸は温まってくれた。手触りは確かな桜柄の名刺を、大事に財布の中に直す。

新しい年の鐘が鳴った。お父さんにライン、と思い出した。喪中の聖を、訪ねてきてくれる約束なのだ。楽しみだった。

了

オマケ

一人の寝床で、夢を見ていた。長い雑木林を抜けた烙徒が、道路で待っていた白いコンパクトカーに乗り込んでいった。

その車に聖は見覚えがある。家出していた聖に一時関わり、実父と引き合わせた橘診療所の、往診の車にそっくりなのだ。

これは夢だ、と改めてわかる。烙徒が死神なら車で移動の必要はないし、橘診療所は三百キロ離れた他県にあるのだから、車の迎えなど効率が悪過ぎるだろう。

聖を実父に会わせた女医が、運転席で不機嫌そうに烙徒を振り返っていた。「ちょっと、烙徒くん。誕生日のプレゼントだけのはずが、何で年末まで滞在が長引いたんですか？　まさかあの子に、手を出したりしてないでしょうね？」

童顔でスーツ姿の女医は、とても年末年始中とは思えない。他ならぬこの女医が、志音は聖の幻覚だと言った相手なのだから、やはりこれは幻の続きだと安心して先を見続ける。

「えー。そりゃ、だってオレ、悪い奴だし」
「ちょっとマテ、悪事担当は冥夜さんにしてもらったはずでしょ。嫌な予感してましたけど、本気の本気であの子、君の本命ちゃんなんですか？」

そう言えば烙徒は、悪い奴扱いの人形を「オレの助手」と当初に言った。となると、悪の元締めは誰だったかになる。

「さあねー？　でも、悪いことしなきゃいけないオレだし、それなら一番手っ取り早いじゃん？」

「そりゃ、いけないことですしね、ってじゃかあしい。端的に言って最低ですよ、烙徒くんは」

ちゃんと責任取るんでしょーね？　と女医が怒る。今時、そんな古いことを言うのはこの人ならではだろう。烙徒くんは存在がセクハラだ！　としまいには叫び出した。

「関係性によるでしょ、そんなん」
「初対面で何を言いますかちょっと黙れ。烙徒くんはすぐに人の心に入り過ぎです。それで何人が泣かされたことか」

烙徒は「その方が早い」と、聖の心を開くために、シオンの人形を持ってきた輩だ。借金などと、最初に詭弁を弄したことも含め、どう調べたのかは知らないが、弱みにつけている才能を持っていることには間違いがない。

「えー。オレいっつも、襲われてるだけなんだけどさ？」
「流されるなら君も同罪。大体大人でしょうが、君は」

「えー、こないだ18になったばかりだよ？」

「それは氷輪翼の戸籍上でしょう！ 全く……コイツ……」

口調の荒い女医の素顔に、思わず笑ってしまったところで夢は止まった。漫才のような掛け合いを夜から見ている聖を、烙徒が気付いて笑ってくれたように見えた。

◆謝辭

『ツキモノ ～聖夜光～』

photo:いみず

著者：pierrette***

掲載：2022年11月4日

*ノベラボにて本編発行予定

：2022年12月24日「釧芦 滓」著

『ツキモノ ～星月夜～』

(聖の家出時代で志音との日々の長編です)

Many thanks for your visit.

ツキモノ 聖夜光

著 pierrette**

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
